

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～
その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2019 (平成31年) 3. 10

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

「祝福の源となるように」

牧師 松谷 祐二

創世記 第二章一～四節

主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが行く地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あなたの名を高める 祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し あなたを呪う者わたしは呪う。地上の氏族はすべて あなたによって祝福に入る。」

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。
(新共同訳聖書)

大洪水の後に、神の好意を得て生き延びたノア。その家族から再び人間は世界中に増え広がりましたが、その人間たちを特徴づけたのは、神の祝福を祝福と思わず、かえって神に敵愾心を燃やし、自らの力を誇示したがる、歪んだ心でした。

未曾有の大災害でも、あるいは大戦の敗北でも、一たび重大な危機を経験したならば、人間はそこから学び、生まれ変わる、と期待したいところですが、それでも変われない、というのが、わたしたちの悲しい現実ではないでしょうか。神が人間をあるべき姿に、「神の似姿」(創世記第一章二七節)に回復し、そこから世界を新しく再創造しようとしても、これでは埒が明けません。このままではいけないはずですが…。

いったい、人間に言うことを聞かせられない神というのは、力がないのでしょうか。いいえ、聖書の神は、天地万物の、宇宙の創造者です。力ある神です。しかし、人間の意思に暴力的に介入すること、力づくで従わせることを、(人間の権力者と違って)お望みにならない神なのです。

聖書の神は、言うことを聞かない神でも、裏切っても、それでも人間を愛し、この世を愛される。人間が自分で考えること、感じることに期待し、

本気でその相手をし、手引きをしようとなさる。そういう方なのです。

その神が今、大胆な一手を打たれました。一人の人を選び、呼び出したのです。選ばれた人の名はアブラム(後に、神が改名をお命じになって「アブラハム」となります)。大洪水の折にも、神がノアとその家族を選ばれたという例がありますから、その点では同じかもしれません。しかし、このたび神はアブラムに「祝福」を与え、「祝福の源となるように」と仰せになった。「地上の氏族はすべて あなたによって祝福に入る」とも。

そもそも天地創造以来、神は人間全体を「祝福」して来られたのですが、人間は総じてその「祝福」を「祝福」として受け止めなくなりました。今や神は、本当は人間全体に与えたいと願っておられる「祝福」を、当面、アブラムという一人の人、その子孫、その民に、集中させようとなさったのです。

神が世界中から一人の人、一つの民を選んで、特別に目をかけ、特別な関係を結ぶ。「あなたを祝福する人をわたしは祝福し あなたを呪う者をわたしは呪う」と言うほどに、神はこの一人の味方になろうとする。この仕方は、「神様はすべての人を幸福にすべきだ」という建前に慣れている現代のわたしたちには、理解しにくいかもしれません。しかし、この一人は、そしてその子孫である一つの民は、神の「祝福」を独占するために選ばれたわけではありません。いつの日か「地上の氏族はすべて あなたによって祝福に入る」という事態が起こるようにと、世界中の人々の先駆けとして選ばれたのです。

さらに、この一人、一つの民には、世界中の他の人々に先んじて、明確な使命が与えられました。それは、神の声、神の言葉に聞き従って生きるという使命です。最初の神の言葉はこれです、「あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが行く地に行きなさい。」

アブラムは元々、父テラの家族の一員として、カルデアのウル(場所としては後のバビロンに近い)からハラ(メソポタミア)へと移住してき

た身でしたが、この家族は皆、ハラで定住していました。生活に必要なものが、そこでは十分に得られたからでしょう。

ところが、神はそのアブラムに、家族と別れて、さらに遠く、わたしが行く地(今日のパレスチナ)へ行け、とお命じになります。今はただ一人でしかないあなたが、わたしは、あなたの子孫を増やして、大いなる国民としよう。わたしはあなたを祝福する。それは、あなたが祝福の源となり、やがてはすべての人が、あなたを通して祝福にあずかるためだ――と。

一人の人アブラムを通して、世界中の人々が祝福にあずかるとは、どういうことでしょうか。この一人が、神の声に従って生きるということを通して、人間が本来持つべき、神との正しい関係を回復される。そして、その生き方が、その子孫に、その民に受け継がれ、やがて世界の他の諸国民にも波及していく。そういうことであつたのではないのでしょうか。神に背き続ける人間、歪んでしまった世界を回復し、救うための、神の偉大なご計画が、こうして動き始めました。

だとすれば、これは重大な使命です。世界中の人々のためにも、神の声、神の言葉に聞き従う生き方をしなければなりません。その使命に忠実でなければ、先んじて神に選ばれ、呼び出された意味がありません。しかも、この使命のつらいところは、その生き方が他の人々からは普通には理解されにくいということです。「神がこう言われるから」などと言って人と違う道を行き、自己満足している変な人だ、と思われるかもしれません。

ユダヤ人は、アブラム(アブラハム)を先祖として大切にしています。今日まで、熱心なユダヤ教徒はこの使命感に生きています。今日まで、熱心なユダヤ人、キリスト教の立場では、むしろイエス・キリストその方こそ、このアブラハムが受けた使命を完全に成し遂げた、世界の祝福の源なる方だ、と信じています。そして、この一人の方を王とする「国民」であるところのキリスト者、キリスト教会も、主イエスの後に従って、何とかこの使命に生きたい、と願っているのです。

牧する

大司宣子

去る二月十一日、東京改革長老教会協議会による長老研修会が、洗足教会において開かれ、出席してまいりました。

横浜指路教会牧師の藤掛先生が「牧会」についてお話しくださいました。

「牧する」とは「神の教会の世話をすること」と先生は仰いました。これは当教会でも、一月の礼拝で使徒言行録二十章において読みましたパウロの言葉です。

教会は神の羊の群れ。群れを牧する羊飼いが必要。主イエスは永遠の契約の血による羊の大牧者です。大牧者キリストはシモン・ペトロに「私の羊を飼いなさい」羊の世話をしなさい、と命じられました。使徒たちに連なる者として神の家族とされた私たちもまた、神の教会の世話をする者です。藤掛先生は、基本的に「牧会する者」と「牧会される者」という区別はない、と言われました。そして「教員が相互に牧会する」この言葉を繰り返して仰いました。

教員がお互いに牧会するとは、どのようなことでしょうか。

「牧会は牧師だけがすることではない」と数年前から、松谷先生が折に触れ、仰っています。キリストを頭として、キリストの体である教会、その教会を牧師だけが牧するのではなく、もちろん、役員（長老）だけが牧するのではありません。教員がお互いに信仰を励まし合い、支え合い、教え合いながら、キリストの体を築いていく意識を高めていくことだと、藤掛先生は言われました。私たちも是非、その高みを目指したいと思いました。

講演からの帰り道、ふと今までの信仰の旅路を振り返りました。

今から十年前の三月初旬、当時の役員の方から、来年度の役員候補に私の名前が挙がっていると告げられました。父が召され、葬儀をして頂いて一週間目のことでした。「お父さんが亡くなったばかりだし……」

と私は言ったのですが「その方は言われました。十代を過ごした西千葉教会でもちろんのこと、それまで役員経験は全くありませんでした。役員に選出され、初めて出席した役員会において、渡邊牧師が一年後に柿の木坂教会に招聘されていることを発表されました。右も左もわからず、緊張した面持ちで座っておりまして私にとっては、衝撃でした。ですがその後、役員会の出席を重ねる中で、祈りの共同体としての動きを知り、教会での役割を学んでいきました。

翌年、松谷先生をお招きした四月の礼拝で、初めて司式をした朝のことを昨日のことのように思い出します。十代から二十代にかけて、赤面症で人前に立つことなど考えられなかった我が身を思うと、神さまの必要に用いられて、変えられてきたことを思います。

数々の試練の前に、耐え難い苦難は与えられないと祈り、神様のおかえりみを求めてきました。苦難は神様から与えられた信仰の訓練と受け取り、歩んでまいりました。また自らが気付かぬ傲慢、背きも試練により気付かされてきました。心に嵐が吹き荒れ、神様との距離が遠くなりそうな時には、礼拝において、必要な言葉が与えられ、また再び、神の国に立ち返ることができました。

松谷先生のお祈りに支えられ導かれて、役員としての奉仕の業も捧げることができたと思います。また、教員の方からの信仰的な励ましを得て、神様の愛に留まることができました。

そして、その主体はつねに聖霊なる神様にありました。

今月二十六日、神の家族にして頂いて四十年目に入ります。その間、迷える子羊の年月もかなりありました。光を見失い、谷底でうずくまっていた私を探し出し、この教会に連れて来て下さった聖霊のお働きに今また、感謝を新たにします。

神様に感謝を捧げつつ、キリストの姿を求め、キリストの姿をあらわす生き方が、「牧会」につながることを祈り、信じます。主よ 終わるまで 仕えまっらん みそば離れず おらせたまえ
(讚美歌三三八番より)

報告

*教会修養会 二月十七日午後三時～五時、日本基督教団美竹教会にて行われた西南支区、役員信徒担当・社会担当共催の講演会「心を育てる ―心の居場所づくり―」講師：酒井道子先生 に参加しました。

各部報告 一二月度

成人会

日時 二月十日十三時～十四時四十五分
場所 教会堂会議室
出席者 四名
開会祈祷 佐藤忠昭兄
ゼファニア書とハガイ書を読む。
・他教を交えて崇拜することに怒った神は、主の日に国を滅ぼす。敬虔な信者は希みを託して救われる。
・神殿の再建の遅れは進行の怠慢と、神は嘆いている。悔い改めて完成を急ぐべきである。
次回ゼカリヤ書八章迄を読む。

婦人会

日時 二月二十四日 主日礼拝後

場所 教会堂会議室
出席者 七名
開会祈祷 菊池才知子姉
閉会祈祷 全員順次小祈祷
内容
一、聖書研究「サムエル記 上」
七章二節～八章

七・二節 イスラエルの人々はキルヤト・エアラムに主の箱を安置してから、二十年が過ぎた。その間、ペリシテ人の襲撃が続き、人々は主の御力を求めていた。サムエルは人々をミツパに集合させ、主に対する罪を告白し、主に祈る儀式を行った。そのことを知ったペリシテの領主たちはイスラエルを攻撃してきた。イスラエル人はサムエルにペリシテ人から自分たちを救って下さるよう主に懇願してほしいと願った。主が激しい雷鳴を轟かせたため、ペリシテ人は混乱し敗退した。サムエルは、ミツパとシエンの間に石を置き、主に感謝してそれをエベン・エゼル(助けの石)と名付けた。

八章 サムエルは高齢になり、イスラエルを統治するものとして二人の息子を任命したが、ヨエルとアビヤは正しい統治をせず汚職に励んだ。長老たちはサムエルの下に集い、自分たちを統治する王を与えよと迫った。主に祈ったサムエルに主の言葉があった。「見える主より見える異教の偶像に頼りたがってきた人々に王の権能を説き納得して王を要求するならば、彼らの声に従うように」と。民は、サムエルの警告に耳を貸さず、王を要求した。

次回 二月二十四日「サムエル記 上」九章～十章まで
二、来年度愛餐会 愛餐会分担グループの再編成とメニューの簡素化などをテーマに協議。
三、三月愛餐会について若干の話し合い